松竹梅

田中克己

わたしは少年のころから植物が好きで、将来は植物学者となるつもりで、牧野富太郎博士を理想の人物像としてゐた。そのせいか今だに植物に関してはなかなかうるさいので、端午の節供の菖蒲はハナショウブではないとしつこく論じてやまない。この頃になつて考へると、わたしが中国にゐた期間は兵として足かけ七ヶ月、地方人として五ヶ月足らずで、場所も限られてをり、時節、時局ともに植物どころでなかつたのが残念である。従つて大学院で中国の本草を論ずる際も自信がなかつたが、執筆の機会を与へられたので論考の一端を示して、専門の方々のお教へを乞はうと思ふ。

中井猛之進博士『東亜植物』の緒言に「(香港で)島見物を終り一同船に帰つて上陸談に花を咲かせたが著者が植物学者である事を知つて居る同船の人々は異口同音に香港の山の草木は日本のものと同じもの許りではありませんかと云うたが事実は大変な相違で赤松と見えるは葉の細い支那の赤松(Pinus Massoniana)であり」とあるのを見て、わたしも驚いたひとりである。この論文の執筆は年末であるが、日本で正月といへば松飾りを思ひ浮べるので(東京などではもう松飾りもあまり見られなくなつたが)、中国の詩文にはもとより、民俗にあらはれる松から論じることとする。

一、松

永尾龍造氏『支那民俗誌』㈠には第四章第二節に「門松」（四九〇頁以下）といふ條があって、少し長くなるが、録すると、

「松は支那でも日本と同様にめでたいものとされてゐて、正月には門外に飾られるものである。尤も支那では……大きな木が少ないのであるから、日本のやうに大きな門松を建てる事は出来難いことであるが、以前には松の小枝を小紙片を以て捲いて、大門の門上に置く風習もあつたし、また或は松と柏との小枝を家の内到るところに掛けて喜ぶ習慣は到る処に行はれてゐるのである。それから満洲人や蒙古人の間には今尚ほ門松を建てる習慣が残つてゐるのである。……吉林では旧年末に成ると、門松に用ふる松を田舎から橇に積んで運び出して来て、松花江の川に沿うた宿屋の庭に山と積んで売り出すさうであるし……また北満地方では到るところに正月の門に松を立て並べる風を見るのである」

と記し、四九一ページには、

「吉林省賓州府政書にも正月三日の條に『黎明に店肆は財神を祭り、爆竹を燃やし、棚を院に建て以て天地の神祇を祀る。松を植つること二株より六株に至る。桃符を上に黏り竚せて燈彩を設く焉』とあつて、松の木を二本から六本位まで植て並べて其の上に桃符を貼ることが書いてある」

とあつて、永尾氏の書の特徴として氏の実見と記録とが混合して記されてゐる。

さてこの記事をよく見ると、初めの方は氏の実見で、大連方面の中国人家庭での松飾りを記しておいでのやうである。清末の名著である敦崇『燕京歳時記』をとり出して見ると、北京では年飯の條に「年飯は金米（黄色の米）と銀米（白色の米）とを煮てつくる。上に松柏の枝をさし、それに金銭、棗、栗、竜眼、香木などを結びつける（下略）」とあつて、柏は畏友小野博士の註によると、

「ハクジやシンパクの類でわが国の柏のごとき落葉樹ではない」

とあるが、松の箇所には註はない。わたしは小野博士と違つて北京在住は敗戦の年の十、十一の二ヶ月のみで、北京

の松は手にとることもなかったが、柏のことは後にゆづるとしても松にも註が必要だつたと思ふ。この点は永尾氏の場合も同じである。

シナの松は標準音ソン song で、『中日大辭典』は「松」とそのまま、『新華字典』では「常緑喬木、種類很多、葉子針形、木材用途很広」と記してゐて、日本のマツがこの甚だ多い種類の中の一と考へられてもよいといふ人があるかもしれない。しかし『辭海』では「徐容切、冬韻。木名。有赤松、黒松、五鬚松等、分詳各條」とある。そこで煩を厭はず、各項を引くと、先づ赤松の條には「(Pinus densiflora) 植物名。松柏科。常緑喬木、高者十余丈。樹皮赤色。葉針形、毎二針為一束、多数叢生。又有褐色小形鱗片状之互生葉。花単性、雌雄同株。雄花生嫩枝基部、為多数雄蕊所成。雌花生茎頂、有多数鱗片、毎一鱗片内二胚種、裸出於外。果実毬状、外面有多数鱗片、二年或三年成熟。木材供建築及器具用」とあり、簡単ではあるが、日本のアカマツと同じものと思はせるやうな記述である。ただ異るのは日本のアカマツの学名が『牧野新植物図鑑』では科名が「まつ科 Pinaceae」で戦前の如く松柏科でないだけである。これは宜しいが、牧野博士は同植物の「漢名」の條で「赤松というのは誤りで日本のマツは支那にはない」とあり、クロマツの條でも Pinus Thunbergii Parl. と学名が『辭海』と同じなのに、その「漢名」の箇所に「黒松は誤つて用いられているもの」と明記してある。「五鬚松」は『辭海』では学名 Pinus parviflora であるが、牧野博士によるとゴヨウマツ（ヒメコマツ）は学名 Pinus pentaphylla Mayr var. Himekomatsu Makino であつて、同じく「漢名」の項に「五鬚松、五釵松など使われているが、正しい使い方ではない」と明記してある。ついでに記すと五釵松は『辭海』では Pinus parviflora, var. pentaphylla と見えてゐて、中国では五鬚松と五釵松とは異つたものになつてゐる。戦後、当用漢字、当用漢字別表（義務教育漢字）がやかましく定められたのも当然であつて、中国の松は絶対に日本のマツではないのである。わたしの調べではマツは日本人に最も愛された樹木で、万葉集に見える多くのマツの歌は麻都の歌であつて、松の歌ではないのだが、万葉人はこの違ひに気づいてゐたかどうか。

それはともかく松は柏とともに中国人にも最も愛された樹木で、前掲『燕京歳時記』には同じく十二月の行事として、正月用に揺銭樹を作るが、これも「松柏の枝の大きな

ものを瓶中にさし、古銭、元宝、造花の石榴などを結びつけ」たものだといふ。しからば北京では松は学名の何にあてるべきか。幸ひに手許にある賈祖璋・賈祖珊共編『中國植物圖鑑』によれば松（Pinus）属は

華山松　P. armandii Franchet　陝甘豫鄂川滇黔産
白皮松　P. bungeana Zucc.　冀晋陝甘鄂川産
海松　P. koraiensis Sieb. et Zucc.　遼吉産
馬尾松　P. massoniana Lambert　魯川滇蘇浙贛鄂湘黔閩粤産
短葉松、赤松、油松　P. tabulaeformis　冀産？

の五種が日本産のアカマツ、クロマツとともにあげられてゐる。北京、天津で見られるのはこれによれば、白皮松か短葉松（赤松、油松）のどちらかに違ひなく、永尾龍造氏が大連で見られたのは海松といふことになる。また大賀一郎博士『満洲の植生状態と植物の分布』によれば、永尾氏の前掲書に引かれた文に見える満洲人や蒙古人が建てる門松は欧洲黒松 Pinus sylvestris ではないかと思ふが、これは前掲『中國植物圖鑑』には見えてゐない。但しわたしどもの在学時代、東大の言語学教授だつた藤岡勝二博士の編になる『大英和辭典』の pine の條には「Scotch p. 黒松、雄松」がこの Pinus sylvestris の訳となつてゐるが、中井博士の如く欧洲黒松と称する方が正しいのではないかと思ふ。

なほくどくなるが永尾氏前掲書にはつづけて

「また南方を旅行して揚子江を上下した人人は、船や筏の上にも、松と竹とを組み合せた、さながら日本の門松と同じやうな飾り物を見て、郷里にでも帰つた様な気分に打たれるといふ事である。宜昌府志に『松柏の枝を焚き、松柏の枝を以て綵勝と合せて大門外に懸く』とある。これと同じ様な記事はあちらこちらにこれを散見するのである」

といふが、長江流域の松は前掲『中國植物圖鑑』によれば、華山松か白皮松か馬尾松であつて絶対に日本のマツとは異つたものである。特に『宜昌府志』に見える松は宜昌が鄂すなはち湖北省の一市であるから華山松か馬尾松か白皮松のどれとも断定できないが、これと同じ様な記事はいくらでもあるなら、長江下流では馬尾松であり、白皮松、華山松なら湖北、四川から江口近くに来るころには、枯れてゐることは、その中流以下の緩やかな流れかたを見た人が必ず実見したことと思ふ。中井博士は中シナ特産の

金銭松属（Pseudolariae）の単型的な植物金銭松（Ps. amabilis Rehder）を挙げ、外形はカラマツ属に似て、ゴルドン氏（G. Gordon）の命名したPs. kaempferi Gord. が美しい葉をもつことを述べておいでなので、素人の目にはこれが松と見まちがへられた場合もあるかと思ふ。

ついでながらわたしの副業とする漢詩文にあらはれる松の初見は、いふまでもなく『詩経』であつて「衛風、竹竿」の第三首は、

淇水滺滺　檜楫松舟

で始まる。高田真治博士訳註『詩経』上には、第二句を「檜（ひのき）の楫（かじ）に松（まつ）の舟」と訳し、檜については「俗名ビャクシン、俗にヒノ木と訓ずるは誤る。ヒノ木は本草の扁柏（邦風、柏舟参照）にして、檜と殊に別なり」との古人の説を引いて註してゐられるが、松には註はない。衛はいまの山東省と河北省の境。黄河の北岸である。従つて前掲『中國植物圖鑑』に寄れば、馬尾松しかないわけであるが、陸文郁氏『詩草木今釋』では、松には多種あるがとことわつて、

短葉馬尾松（河北習見樹木圖説）又名、赤松（河北習見樹木圖説）、短葉松（造林要義）、油松、紅皮松（俗名）

とし、学名をP. tabulaeformis Carr. とし、華中華南では一、〇〇〇メートル以上の山地に生える馬尾松P. massoniana Lamb. と混同されるが、近年はじめて識別されるやうになつたと記してゐる。現地の松を検し得ないわたしにはこの二書のいづれが正しいか判じかねるが、高野正男氏『北支の自然科学』には「日本人にとつて懐しいのは北京に来てはじめて松の樹が見られることである。これはマンシュウクロマツ　赤松　油松P. tabulaeformis であるが、なほこの外、景山等では白樺のやうな樹皮をした白松　P. bungeana を見ることが出来る」と述べておいでである。従つて『詩経』の松の学名比定はわたしには不能ではあるが、赤松はもとよりアカマツ（メマツ）ではなく、短葉馬尾松である。深江輔仁『本草和名』は平安初期の本草学の水準を示す著書であるが、松蘿には「マツノコケ」と訓じ、松脂には訓なく、松実も訓なく、松（の木）そのものは本草（即ち薬物）にならないからか挙げてゐない。わたしの漢詩作製（生涯に唯一首）を訂正された故鈴木豹軒博士は詩作には厳格であらせられたが、念のため師の名訳『玉臺新詠集上』古詩八首の第六「四坐且莫諠」の「上枝以松柏」といふ箇所を見ると「上の枝は松や柏で」と気楽に訳

しておいでである。この気楽さはわたしも同様で、先年やつと二版が出て、初版の誤字、誤謬はみな訂正した『白樂天』でも「松齋自題」の松には註しなかつた。この松齋は白樂天が数へ年三六歳、翰林学士の時の書斎の名である。従つて松齋の「松」は長安に多い華山松かと思ふが白皮松であつてもよい。彼の生地である河南省にも生えるからである。専家の御教示を乞ふ。もとより李白の「贈孟浩然」に見える「白首臥松雲」は孟浩然が上京して玄宗皇帝の不興を買つて帰郷（いま湖北省襄陽）したあとこれに贈つた詩であるから、李白が曽遊の地でもある襄陽の松とすれば華山松、白皮松、馬尾松のどれかで、この三種はすべて李白が成長した四川に産する。大詩人李白の酔眼はわたしの如き小人と違つて三種の区別などしなかつたことと思ふが、とまれ「松」であつて、「マツ」ではなかつたのである。

二、竹

竹は万葉集にもよく見えるが、旧知小清水卓二博士『万葉の草・木・花』によれば、万葉集で「多気」、「竹」と表はされる一八首はみなマダケ Phyllostachys reticulata C. Koch であるとされる。しかし前掲『中國植物圖鑑』では竹の名をもつ植物は極めて多く、属も五属以上あり、

四季竹、笛竹、寒山竹(日)　Arundinaria hindsii Munro.

金竹　A. murielae Gamble.　粤湘鄂産

紫竹、寒竹(日)　A. marmorea Makino

方角　A. quandrangularis Makino

山竹、メダケ(日)　A. simoni Riv.

疎節竹、唐竹(日)　A. tootsik Makino

鳳尾竹　Bambusa nana Roxb.

龍頭竹　B. vulgaris Schrad.

海南竹　B. tuldoides Munro.　海南島産

麻竹　Dendrocalamus latiforus Munro.　粤産

人面竹　Phyllostachys aurea Riv.

箭竹、苦竹　Ph. bamusoides Sieb. et Zucc.　魯鄂閩産

江南竹、孟宗竹(日)　Ph. mitis Riv.

亀紋竹、仏面竹　Ph. m. R. var. hetevocycla Makino

烏竹、クロチク(日)　Ph. nidularia Munro. (Ph. nigra Pilger)　鄂西産

淡竹　Ph. puberula Munro.　川鄂贛浙魯産
斑竹　Ph. p. M. var. boryana Makino
山白竹、箬竹　Sasa albo-marginata Mak. et Shib.

の一八種が挙げられてゐる。北シナには少く中シナ、南シナには至るところに「竹」が見られるわけである。牧野博士によれば、最後の山白竹、即ちクマザサが九州に自生するほか、鳳尾竹、即ちホウライチク（ドジョウダケ）、マダケ、即ち苦竹はともに中国が原産地の由であり、多般竹（ゴザンチク、ホテイチク）は九州に野生があるが、ハチク（クレチク、カラダケ）はもとより中国が原産、淡竹、クロチクは烏竹で観賞用といふから中国が原産地であることは疑ひない。京都を中心にして美味の筍を産する孟宗竹は、孝子孟宗と実際の関係があるかどうか、日本渡来は極めて新しく徳川時代に薩摩に来り、江戸は京都より早くこれを植ゑたとのことである。

さて中国では「竹」の名は古く『易経』、『書経』、『礼記』、『春秋左氏伝』に見えるが、この多くの種のどれをいふのかは確言できない。しかし『詩経』「衛風、竹竿」に見える「竹」は前掲『詩草木今釋』では江南竹とし、学名を Phyllostachys edulis Houze. de Leha. と記し、産地を浙江、江西、安徽、江蘇等の中シナと記してゐる。『詩経』の北シナの風物を詠じてゐるのに対して不審であるが、淡竹（ハチク）なら湖北、山東諸省にも産するから、「衛（山東・河北）風」のいふのとまづ合ふのではなからうか。

これと同じく素人植物学者のわたしを困惑させるのは林語堂の随筆に見える竹である。

戦前、吉村正一郎氏の訳された『岩波新書』の『林語堂随筆』で読んだおぼえがあるが、これは早く手ばなしたので、手許にある台湾版の『林語堂選集』を検すると、果して第一〇冊目に「竹話」が載つてゐる。拙訳承知であらためて記すと、「夏になつて、夜の涼みに一張の竹のベッドで眠ると気持の良さが格別である。そこで考へてみるとわが国の文化、とりわけ内地の農民の文化の一半はこの竹の上に建つてゐる。竹なくしては、中国の文人の生活は、ほとんど精彩の一部を失ふし、中国の詩文は、このものを欠けば色彩が変るはずである。蘇東坡が、寧ろ食に肉無かるべきも、居に竹無かるべからず、といつてから、竹の中国の文人生活における地位は定まつてしまつた。ただに詩文の上のみならず、われらの家居園宅においても、あるひは

山水に登臨しても、胸中から竹の幽かな影は去ることができようか。梅の瘦、蘭の幽、柏の古、竹の秀はすでにわれわれの審美中の一重要観念となつてゐる。

事実、竹の秀美がわれわれの鑒賞に供し得るのみでなく、その軽靭光潔は、実用上、中国人の発生と極大な関係がある。郷村（当然、竹の生える地方に限るが）では、農民はその椅子やベッドから箕・簍・篩・畚に至るまで、どれ一つ竹を欠くことはできない。竹器を用ゐなければ、手で土を盛り、手で飯を吃ひ、地べたに坐り、地面に睡ることとなる。わたしは南方で生長したので（林語堂は福建省の生れである――訳者註）、この竹の効用は一番よく感じてゐる。中国人は生れて来ると、竹を編んだ揺籃で寝、死ねば棺桶は常に竹ざをでかつぎ出される。夏の夜は仕事もないので、家人と竹の器の種類を数へてみると、忽ちのうちに、百種に達し、同時にこれを考へたので、思郷の念を起してしまつた」といふ。

中日の国交や国家の大事に談及しないのは、そのころではただこの種の文章が作れるだけで、それも救国に関係なく「留心小草」の輩で、「わたしと同じく中日の国交、国家の大事に言及しない読者が見れば、喫茶飲酒のあとの材料にならう。文学よ、文学、文学、わたしはこれを見聞きすると時には頭痛がなくなるのだ。

竹の中国で用ゐられたのは甚だ古い。多くの器物は現在は竹製でないが、昔は明らかに竹製だつた。たとへば「簷」はもと屋上の竹筒の水を漏らすものにすぎなかつた。古の婦人のカンザシはおほむね竹刻製であつた。祭器には簠、簋などがあり、楽器のことはいふ必要もない。紙を造る前は、記写に関係したのはすべて、甲骨以後は周漢の竹簡で、それゆゑ篆、簡、策、簿、籍、符、籙、籤はすべて竹カンムリを用ゐてゐる。箴が針といつても、大低は竹針の類で、笵は一種の竹型であるがいまはしばらく現代に用ゐられる物の範囲で話してみよう。

（甲）竹竿・竹筒類

一、扁擔。二、轎槓。三、輿轎。四、船篙・鈎等。五、晒衣竿。六、銭筒（田舎の店では大竹筒に銭をいれる）。七、竹梯。九、漁竿。十、旗竿（無線電竿等）。十一、床帳竿。十二、山廟では筧で泉水を引く。十三、竹杖。十四、旱煙筒。十五、器ものの柄。十六、笛、篪等。十七、紮棚架。

（乙）竹節類

十八、轆轤。十九、幼兒用車の竹輪。二十、筩、承水器。二十、竿筒。二十一、筆筒。二十二、火油燈筒。二十三、醬油罐等。二十四、陳列物の座。二十五、洗髪用円竹節、有歯。二十六、竹碗。二十七、年夜の爆竹。

（丙）竹板類

二十八、尺。二十九、弓。三十、箭。三十一、楹の聯刻字。三十二、竹椅子。三十三、竹凳。三十四、桌。三十五、書櫥。三十六、什物櫥、廚房用。三十七、竹榻。三十八、竹床。三十九、竹馬。四十、各種玩具（竹刀、竹剣等）。四十一、簽、籌碼等。四十二、麻雀。四十三、神籤。四十四、香枝。四十五、箸（筷）。四十六、売餛飩者の敲板。四十七、楽工用拍板。四十八、織絨線針。四十九、筆。五十、竹剪（蘭花剪り用）。五十一、耳挖。五十二、牙籤。五十三、爬背。五十四、竹釘（造船用）。五十五、荊杖（私塾用）。五十六、風箏の骨。五十七、燈籠の骨。五十八、鳥籠。五十九、風槍（玩物）。六十、扇の骨。六十一、紙人紙馬の骨架。六十二、竹枕。

（丁）編篾類

六十三、席（多種）。六十四、篾席（地に敷く、或は天井板用）。六十五、麦打ちの席。六十六、船の帆。六十七、篾子。六十八、竹簾。六十九、門槅子。七十、竹屏風。七十一、籃（菜籃等）。七十二、簍、畚箕（簀）等。七十三、篩、簸箕等。七十四、蒸籠。七十五、篾包（打包用）。七十六、各種細籃細筐。七十七、涼棚。七十八、魚筌。七十九、雞籠。八十、猪欄。八十一、洗帚。八十二、竹耙。八十三、竹籬。八十四、護牆（郷の当鋪など竹を編んで牆としこそどろを防ぐ。牆をぬけると竹の音がする）。八十五、瓜架、各種の槅架。八十六、竹刷。八十七、箱、筒、篋。八十八、揺籃。八十九、篾箍。九十、手烘爐の外側。

（戊）竹葉類

九十一、粽子を包む。九十二、竹笠。九十三、蒸饅頭用。

（己）什類

九十四、造紙。九十五、竹筍（中国食品要素）。九十六、四川筍（竹簧で湯をつくる）。九十七、楽器の簧。九十八、籜（筍の皮で女の鞋底を作る）。九十九、燃料。一百、竹根の古拙なもの（古玩にできる）。」

林語堂は福建省の漳州の人なので北京語を中心とした「中日大辭典」などでは手にあまるし、家蔵の「台日大辭

典」も暑さのせいでか引く気にもならないので、吉村さん（英語からの訳と思ふ）には及びもつかないが、竹の用途を殆ど全部あげてゐるやうである。しかし「わが宿のいささむら竹吹く風の音のかそけきこの夕かも」といふ大伴家持の風情は実用的でないので挙げてゐない。尤もこの文は民国二四年八月一日の作であるから、満洲事変が起つてから五年め、日華事変となる前年の昭和十年のことである。愛国者としての林語堂にその境致を責めるのがむりであらう。ただ十幾種に上る竹のどれがどの用法に適するかを明かにしない。もとよりわれわれがラーメンに入れられてゐるのを喜ぶ乾筍がインドネシア原産のマチク（麻竹 Dendrocalamus latiflorus Munro）の筍だなどいふことは本田正次先生によつて、わたしも始めて知つた。ラーメンは戦後はじめて日本人の好む食物となつたのであるから、これはもとより林語堂とは関係ないことである。

三、梅

梅が唐土より来つた植物であることは、烏梅（ウメイ）の音がこれを証明してゐる。ただし品種はさまざまであるが、バラ科の Prunus Mume Sieb. et Zucc. 一種でその他のヤツブサウメ（ザロンバイ）、コウメ（シナノウメ）、リョクガクバイ、ブンゴウメなど各地各様のものはみなその一変種に過ぎない。わたしはもう二十年近い昔になるが、「唐詩の草木」なる随筆を書く時に検して、唐人に最も好んで歌はれたのは、竹、松、柳、蓮、桃、桂、蘭、苔であつて、梅はその下位に甘んじてゐるのに驚いた。といふのは旧知小清水博士によつて示された万葉集の中の植物がウメはハギについで多く、松、藻、橘、ヌバタマの順となり、唐土と趣を異にしてゐるのに気づいたからである。あたかも、われわれがバラやスミレ（野生でない方、即ちヴァイオレット）を菊、桜以上に好むのと同じく、珍らしいものにとびつく国民性のあらはれかもしれない。但し近ごろ同僚で万葉学の権威である中西進博士に伺ひを立てると、平安朝以後ウメに代るサクラは万葉ではハナとして多く歌はれてゐる由だから、『万葉集索引』でも見れば、ウメ以上かもしれないが、この方は検するどころか、中西博士に再度お伺ひを立てる暇さへ見つけないでゐる。余談はさておく、梅は花のみならず実も役立つ点、桜（サクランボはサクラの実でなくセイヨウミザクラ Prunus Avium L. といふ全

く別種の実である）とは大違ひであるが、花よりも実の方に重きを置かれたのが、唐詩での順位で証明されてゐるのだと思ふ。しかし次第に順位が上つて「松竹梅」といはれ、「歳寒三友」といはれたのは唐より後、明代のことで日本はもとよりそのあと、江戸時代からのことに相違ない。

ただし「歳寒三友」も宋明以来の華中が文化の中心となつてからのことで、百花に先んじて咲く花としてめでられたのであるが、華北たとへば北京などでは旧暦正月には温室咲以外はその花が見られる筈もなく、冬至に一枝の梅を描き、八十一枚の花瓣をつけて、一日に一瓣づつ色をぬり八十一日めに塗り尽すとすでに春が深くなつてゐるといふ「九九消寒図」といふのが明代から行はれた。いかにも北地の春を待つ気持をよくあらはした風流な行事である。